

相好行相

編集・発行 飯島可琳

はじめに

たびたび発生する自然災害も、今年世界中を苦しめている感染症も、原因は不可視である。人間は何らかの結果が出て初めて気づく。おそらく古代の人々は、これらの現象が人間の悪行に対する警告であると認識し、事態を受け入れて恭順の意を示すことで、神仏の真意を尋ねた。

奈良時代が分かりやすい例だ。「鎮護国家」の思想に基づき、国家は仏教を勧め、規模の大きな官寺が多数建てられた。寺院の造立や仏像の制作は単なる「神頼み」ではなかったはずだ。天然痘や大地震などの諸問題に對峙するための、公の手による大

規模で真摯な事業だったろう。

現金なこと、現代人は結果を求めがちである。それゆえに祈りの「結果」に対する分かりやすく直接的な作用を「御利益」として期待してしまう。一方で、古代人が神仏に求めたのは問題処理の「方法」であった。「私たちはいかに生きれば良いでしょうか」という謙虚な問いの答えを神仏に求めたのである。

現代人は、微小なウイルスも捕捉できるようになったし、気象の変化が生じるプロセスも把握できるようになった。端的に言えば、様々な道具を使い、肉眼では見ることでできないもの

を見る能力を手に入れたのである。しかし、ウイルスが見えても感染はとめられず、気象観測が精密になっても集中豪雨の被害を回避できるわけではない。外形や作用の一部が見えるだけで、全てを把握できているわけではないのである。

古代人と同様に無力であることを現代人は自覚しなければならぬ。しかし、見えているという表面的な事実が自覚を妨げ、我々から信仰と祈りを発動させるきっかけをすっかり奪ってしまったように思える。コロナウイルスの惨禍は、人類が自らの所業を顧みる契機として捉えるべきだろう。

再会

東大寺ミュージアム

感染症対策の観点から、可能な限り人との物理的な接触を避ける生活を送ること、長距離の移動を控えることが推奨されている。再会の場合は、意図して設け

この機会に、戒壇院千手堂が開かれ、戒壇堂の四天王は東大寺ミュージアムに仮住まいされることになった。二組は久方ぶりの再会を果たしたのである。

偶然であって演出ではないのかも知れないが、二組が向かい合う構図はいわゆる再会のイメージに合致する。そのため、ミュージアムを訪ねると彼らが再会したという実感が強く得られるし、自らその目撃者となったことに満足できるような気がする。

四月堂千手観音の脇に日光月光菩薩が並ぶガラスケースと、四天王の立つ展示台を隔てる広い空間を歩きながら、相対する二組の顔を見比べてみると、四天王の表情が険しいと感じる。四天王は悪しき存在を威嚇する立場なので当然だと割り切ることもできる。だが、予め思い描いていた、穏やかで心温まる再会の情景に、四天王の表情の険

られることも意図せず作り出されることもあるが、現在、私たちはいかなる形の再会からも遠ざかっている。例外として、新型コロナウイルスの騒動によって強制的に作り出された再会の場がある。顔を合わせるのが常である人同士が、休校や休業によって離ればなれになったことから生じた「再開による再会」の事例だ。だが、遠隔授業が続く大学生のように、再会の目途が立たない場合もある。いずれにせよ、私たちは再会に飢えている。だからこそ、東大寺法華堂の日光月光菩薩像と戒壇堂四天王像が再会したというニュースに心躍る。

「戒壇院戒壇堂の四天王」として親しまれている四天王像だが、元は日光月光菩薩像と共に法華堂八角須弥壇に安置されていた可能性が高いそうだ。東大寺戒壇堂は保存修理及び耐震工事のため、およそ三年間閉鎖される。しさはなじまない。

このたびの展示は、四天王の背中越しに展示室を見渡せる点が特徴的である。四天王の背後から見直した再会のシーンは、青春ドラマのように眩しい。四天王の表情が視界に入らず、微笑みを浮かべた日光月光菩薩像のみが強く印象づけられるからだろう。四天王の背中から怒りを強く感じないこともまた要因に挙げられる。人間であれば、怒っている時、体全体が怒りの感情に支配され、背中もその気を発してしまうが、仏の場合は違うらしい。

堂内の物理的配置にかかわらず、四天王が背にして護るのは仏法である。来場者は仏法の立ち位置から四天王を臨むことになる。四天王に護られる空間の居心地を感じ取ってほしい。

※掲載写真は東大寺庶務執事の森本師からお借りしました。ご協力ありがとうございます。



撮影：森本公穰師